

# 生活科における「学校」に関する一考察

—「学校」に関する内容の変遷と「気付き」の問題—

朝倉 淳

(2003年9月30日受理)

A Study on "School" as Contents of Life Environment Studies  
—The Issue of Awareness and Transition of "School" as the Contents—

Atsushi Asakura

The purpose of the present study is to show the issue of awareness in Life Environment Studies through the transition of Course of Studies, textbooks and the objectives of the units on "School". Two educational implications are drawn from the investigations of the transition. The results are as follows; 1) It is important to anticipate and describe children's awareness concretely for teachers before lessons. 2) Teachers should make a discussion as one of activities in Life Environment Studies for sharing of awareness after studies and activities through actual experiences.

Key words: Life Environment Studies, awareness, course of study, textbook, school

キーワード：生活科，気付き，学習指導要領，教科書，学校

## 1. はじめに

生活科における「気付き」は、創設以来10余年を経過した生活科の主要な実践上の課題であり、研究課題でもある。1997年11月の教育課程審議会の中間まとめにおいて、「(前略)、一部に画一的な教育活動がみられたり、単に活動するだけにとどまっていて、自分と身近な社会や自然、人にかかわる知的な気付きを深めることが十分でない状況も見られる。」と指摘されているとおりである。

この課題に取り組むためには、その前提として、生活科における「気付き」の概念を明確にするとともに、「気付き」の内容や過程などの状況を教科課程のレベルや授業計画のレベル、授業実践のレベルにおいて把握することが必要である。生活科における「気付き」の概念については、未だ共通理解に達していないものの、生活科の創設当初から、中野重人<sup>1)</sup>、谷川彰英<sup>2)</sup>、無藤隆<sup>3)</sup>、嶋野道弘<sup>4)</sup>をはじめ多くの研究者・実践者によって検討されてきている。一方、「気付き」の状況についての研究は始まったばかりで数も少なく、研

究方法も確立されていない。本小論においては、教科課程、授業計画のレベルにおける「気付き」の内容に焦点をあてた基礎的な考察を試みたい。

言うまでもなく生活科は総合的な教科であり、そこで生起する「気付き」も多種多様である。「気付き」を具体的に考察するためには、方法論として、特定の内容に絞ったり特定の観点を設定したりする必要がある。本小論では、生活科において第1学年の子どもが最初に出会う学習材である「学校」を事例として取り上げ、「学校」に関する内容の変遷を通して、今日の生活科における「気付き」の状況の問題点を明らかにすることを目的とする。

「学校」に関する学習は、生活科創設以前より小学校低学年社会科を中心として行われてきた。本小論では、考察の対象とする時間的な範囲を、生活科創設前の1977年版小学校学習指導要領における教育実践の時期から今日までとし、以下の方法で考察する。まず、1977年版、1989年版及び1998年版の小学校学習指導要領における「学校」に関する内容の違いを示す<sup>5)</sup>。次に、これらの学習指導要領に基づいて編纂された教科

書類から事例を取り上げ、「学校」に関する内容を縦断的に検討し、その違いを示す。さらに、各時期の実践事例等に記述された単元の目標やねらいなど(以下、簡潔に「単元目標」と記す。)における「学校」に関する内容の違いを示す。最後に、これらの変遷を通して、教科課程、授業計画のレベルにおける「学校」に関する内容の状況を考察し、生活科における「気付き」の問題点を指摘する。

## 2. 小学校学習指導要領における「学校」

### 2.1. 1977年版と1989年版との比較

表1は、1977年版小学校学習指導要領第2章第2節社会、1989年版小学校学習指導要領第2章第5節生活、及び1998年版小学校学習指導要領第2章第5節生活において、「第1学年」または「第1学年及び第2学年」の内容として示された「学校」に関する記述を示したものである。あわせて、各学習指導要領に対応する文部省『小学校指導書 社会編』(大阪書籍, 1978), 文部省『小学校指導書 生活編』(教育出版, 1989), 文部省『小学校学習指導要領解説 生活編』(日本文教出版, 1999)における、内容としての「学校」に関する説明を整理して示したものである。「学校」に関して、1977年版と1989年版を比べた時、どのような相違点があるだろうか。

形式的には、取り扱う教科が社会科から生活科へと変わったことである。1977年版では社会科において2項目に分けて示された内容が、1989年版では生活科において通学路など学校外の他の項目も加える形で1項目にまとめて示されている。

内容については、次のような相違が見られる。

学習指導要領の記述では、文末表現が「～に気付かせる。」から、「～が分かり、～ができるようにするとともに、～」となっている。気付くことだけでなく、実際に「できる」ことの重視である。具体的な内容についても相違がある。『小学校指導書 社会編』や『小学校指導書 生活編』の説明によれば、1977年版では、学校にいる人々の活動が「仕事」として取り上げられ、その意味が扱われているが、1989年版では、学校にいる人々が「自分たちを支えていること」と表現され、「仕事」としての意味合いは薄くなっている。「もの」についても、「道具や施設の数をそろえてあること」や「使うための決まりがあること」などの記述が消え、施設や設備の使い方が重視されている。生活科において、事象を客観的に捉えることを主なねらいとせず<sup>6)</sup>、教科目標にもある「自分とのかかわり」

を重視することの表れである。

### 2.2. 1989年版と1998年版との比較

形式的には、1989年版では「第1学年」の内容として示されたものが、1998年版では「第1学年及び第2学年」の内容として2学年まとめて示されていることが、相違点である。しかし、「学校」に関する内容は、その性格から、事実上、第1学年の内容と考えることができよう。

内容については、学習指導要領における直接「学校」に関する記述にはほとんど違いがない。具体的な内容については、『小学校指導書 生活編』や『小学校学習指導要領解説 生活編』の説明によれば、1998年版では、1989年版で明確に触れられていない「みんなのものであること」や「きまり」などについて記述されている。この点について言えば、1998年版は、1989年版よりはむしろ1977年版に近い。

## 3. 教科書類における「学校」

### 3.1. 教科書類の調査方法

ここでは、教科書を縦断的にみるために事例としてT社の4点の教科書類を取り上げた<sup>7)</sup>。1977年版小学校学習指導要領による最終版の社会科第1学年の準教科書(以下、社会科準教科書)、同理科第1学年の教科書(以下、理科教科書)、1989年版小学校学習指導要領による最初の生活科第1学年の教科書(以下、生活科教科書A)、1998年版小学校学習指導要領による最初の生活科第1学年・第2学年(上)の教科書(以下、生活科教科書B)である。理科教科書については、生活科教科書A、生活科教科書Bにおいて、「学校」に関する単元に栽培関係の内容が含まれていたために調査対象に含めた。

各教科書の直接「学校」に関する頁について、すべての文字情報を取り出し、見出し文、本文、吹き出し類、キャプション、カード(ワークシート)に分類した。この結果(一部)を表2で示す。また、同様に、すべての写真、挿絵、図など、画像による情報の内容を調査した。調査の点数は表3のとおりである。次項以下で、各教科書類における文字情報、画像情報の結果を比較検討して、その違いを示す。

### 3.2. 社会科準教科書・理科教科書と生活科教科書Aとの比較

生活科は、具体的な活動や体験の重視が特徴である。しかし、意外にも「学校」に関する頁の文字情報の量は、社会科準教科書と理科教科書を合わせたものより、

表1. 小学校学習指導要領等における「学校」に関する記述（社会科・生活科）

文部省「小学校学習指導要領」に示されている「学校」に関する内容		文部省『小学校指導書 社会編』（1978）、文部省『小学校指導書 生活編』（1989）、及び文部省『小学校学習指導要領解説 生活編』（1999）の「学校」に関する記述を要約・補筆などにより整理したもの
(1977年版) 第2章 各教科 第2節 社会 第2 各学年の目標及び内容 〔第1学年〕 2 内容	(1) 学校生活を支えている先生や他の人々の仕事の様子に気付かせる。	学級担任、養護教諭、その他校務に携わっている人々の働きによって自分たちの学校生活が支えられていること 学級担任、養護教諭、その他校務に携わっている人々の仕事の意味
	(2) 学校や公園にある道具や施設を人々が共用していることに気付かせる。	人々がこのような道具や施設を共用していること このような道具や施設を利用するときには、他に使う人の場合のことを考えなければならないことや、使うための決まりがあること 人々が一度に使うことができるように道具や施設の数をそろえてあることなど これらの道具や施設の世話をしている人々がいること
(1989年版) 第2章 各教科 第5節 生活 第2 各学年の目標及び内容 〔第1学年及び第2学年〕 2 内容〔第1学年〕	(1) 学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のこと分かり、学校において楽しく遊びや生活ができるようにするとともに、通学路の様子などについて調べ、安全な登下校ができるようにする。	学校には自分たちの教室の外にもいろいろな教室や施設や設備などがあること いろいろな教室や施設や設備などの使い方 学校には、担任の先生の外にいろいろな先生や人々がいて、自分たちを支えていること 学級や一緒に通学する友達の名前など
(1998年版) 第2章 各教科 第5節 生活 第2 各学年の目標及び内容 〔第1学年及び第2学年〕 2 内容	(1) 学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のこと分かり、楽しく安心して遊びや生活ができるようにするとともに、通学路の様子などに関心を持ち、安全な登下校ができるようにする。	学校の施設の様子や学校にいる人々のこと (例えば、体育館の意味、遊具を利用して遊ぶ楽しさやその使い方、動物と触れ合う楽しさや動物の様子、けがや病気のとくに世話をしてくれる人がいること、友達のよさ) 学校の施設について、今自分が使っているが、それはみんなのものであること 学校にはみんなが気持ちよく安全に生活するためのきまりやマナーがあること

表2. 教科書類における「学校」に関する文字情報（紙幅の関係でカード、板書、キャプション類は省略）

教科書類	見出し文	本文	吹き出し類 (子ども)	吹き出し類 (キャラクター)
(社会科準教科書) あたらしい しゃかい1	あたらしいともだち みんなともだち 1わたしがっこう がっこうたんけん がっこうにあるもの 2がっこうではたらくひ とびと せんせい ようむやきゅうしよく のしごとをするひと	おはよう。 おもしろそうだな。 みんなでつかうものを えにかいて、はってみま しょう。	おおぜいだね。 どうぞよろしく。	
(理科教科書) あたらしい りか1	みんなのがっこう 1たねまき めばえ	いつめがでるでしょう か。 どんなめができましたか。		
(生活科教科書A) あたらしい せいかつ1	ともだちほしいな ともだちとあそぼう がっこうたんけんをし よう きれいなはなをさかせ よう	おはよう。 おはよう。 あそぼう。 どこへいこうかな。 いろいろなひとがいる ね。 これ、なあに。 わあ、あったかい。 わたしたちのがっこう よ。 たねをまこうよ。 はやくおおきくなって。	はじめまして。 おおきなへやがあつた よ。 すごいな。 ほかのところへもいつ てみたいね。 おにいさん、おねえさん ありがとう。 こうちょうせんせいに もあげるんだ。 おおきなはながさくと いいな。	どんなにおいがするか な。 どきどきしているね。 だいじにとっておこう ね。 にがしてあげてね。 あめふりだからみずは いらぬ。
(生活科教科書B) あたらしい せいかつ 1・2上	ともだちいっぱい みんなであそぼう がっこうをたんけんし よう みつけたことをおしえ よう がっこうをたんけんし よう たねまきをしよう たねまきをしよう	すこしどきどき とつてもわくわく 1ねんせいだもん。 いっしょにあそぼう。 どこへいつてみようか。 なにがあるのかな。 なかよしになりたいね。 もういちどいつてみよ う。 どんなはながさくのか な。 はやくおおきくなって ね。	いってきます。 おはよう。 こんどはどこへいこう かな。 せんせい、おねえさんの いすにすわらせてもら ったよ。 さようなら。 がっこうにはせんせい のへやがあるんだよ。 どうしたのかな。	どんなひとがいるのか な。 どんなへやがあるのか な。 あとでてをあらおうね。 いろいろなことをみつ けたんだね。 もつとききたいな。 どんなふうなたねをま いたらいいのかな。

表3. 教科書類における写真・絵図の点数（「学校」に関する頁分）

教科書類名	検定年	調査頁	実点数（）内は構成比(%)			1頁あたりの点数		
			写真	絵図	計	写真	絵図	計
あたらしいしゃかい1	-	2-27	25 (69)	11 (31)	36 (100)	0.96	0.42	1.38
あたらしいりか1	1988	2-9	24 (77)	7 (23)	31 (100)	3	0.88	3.88
あたらしいせいかつ1	1991	2-25	27 (52)	25 (48)	52 (100)	1.13	1.04	2.17
あたらしいせいかつ1・2上	2000	2-21	68 (85)	12 (15)	80 (100)	3.4	0.6	4

注1)「あたらしいしゃかい1」は教科書ではないため検定は受けていない。調査には「あたらしいりか1」と同時期に使用されたものを用いた。

注2) 絵図の中には、絵の中に写真を合成して作成されたものを含む。

生活科教科書の方が多い。ただし、見出しについては逆に、社会科準教科書、理科教科書の方が細かく見出しが付けられている。

本文については、社会科準教科書で子どもの言葉が2文、指導者側の言葉が1文、理科教科書で子どもの言葉が0文、指導者側の言葉が2文である。これに対して、生活科教科書Aでは10文のすべてが子どもの言葉によって表現されている。

吹き出し類（子ども）も、社会科準教科書で2文、理科教科書で0文であるのに対し、生活科教科書では7文と大きな違いがある。また、生活科教科書ではキャラクターを登場させ、いろいろなことを語らせている（5文）ことも特徴的である。その内容は、五感の使用に関することや留意事項などであり、それらをさりげなく伝えている。ただし、キャラクターの使用については、現行の社会科教科書などでも一般的となってきた。

その他、社会科準教科書において、挿絵の中の板書に、「みてきたこと ○どんなへや ○あったもの ○いたひと」や「みんなでつかうもの ぼくのもの・わたしのもの」などが示されていることも違いである。発問や学習内容の整理の仕方を暗示させるものであるが、生活科教科書には見られない。一方、生活科教科書では、カード（ワークシート）を示して学習活動や振り返りを暗示する手法がとられている。

社会科準教科書・理科教科書と生活科教科書Aの間には、画像の情報についても、相違が見られる。

前者にあって後者にない場面として、「自画像を使つての自己紹介」「見てきたことの発表」「みんなで使う物についての話し合い」などいわゆる一斉授業の場面、「教室掲示」「教具の準備」「打ち合わせ」という先生の仕事の場面などがある。また、扱いが軽くなった場面として、校長、用務員、調理員の仕事の場面などがあげられる。

一方、社会科準教科書・理科教科書にはなくて、生

活科教科書Aに見られる場面もある。例えば、学校探検の様子を、グループで先生に話す場面である。また、新たに、糊やはさみの使い方についても図示されている。これは「生活上必要な習慣や技能」として、関係する製作活動にあわせて示されたものと考えられる。

「特別教室」は双方で扱われるが、前者では上級生の授業風景の観察が中心であるのに対し、後者では自らがその場所にあるものを使用してみる場面も多く取り上げられている。「手洗い」については、社会科準教科書では水道という設備があることに焦点化され描かれているが、生活科教科書Aでは手洗いをする場合を示す意図でより丁寧に示されている。

このような変容は、当然、「学校」の学習が第1学年社会科から第1学年生活科へ移行したことがその要因であり、新教科における「学校」単元を「生活科らしく」構成した結果であると考えられる。事例とした教科書では、学習指導要領の改訂がそのまま強く影響していると言える。

### 3.3. 生活科教科書Aと生活科教科書Bとの比較

生活科教科書Aと生活科教科書Bとの相違は、前項で示した相違に比べて、わずかである。文字情報については、表現内容に多少の違いはあるが、分量や機能のたせ方など基本的には同様である。

画像の情報については、生活科教科書Bにおいて、写真の点数が増え、資料性の向上が図られている。その他、手作りのジョウロが登場したり、上級生とのかかわりの場面が減少したりしているが、これらも大きな変容ではない。

## 4. 単元目標における「学校」

### 4.1. 1977年版による第1学年社会科における「学校」に関する単元目標

学校に関する単元は、第1学年社会科の最初の単元

として、日本における社会科の誕生以来40年以上にわたって実践されてきた。この単元では、どのようなことが目標とされていたのだろうか。低学年社会科が廃止される直近の1977年版小学校学習指導要領による実践事例等に記された単元目標は、例えば表4のようなものである。多くの事例では、単元が、3時間から10時間程度のいくつかの小単元で構成されていた。この時期の単元目標は、学習指導要領や指導書の記述に近い形で表現され、「仕事」「はたらき」「道具や施設の共用」などに気付かせることが目標とされている場合が多い。

#### 4.2. 1989年版による第1学年生活科における「学校」に関する単元目標

表5は、1989年版小学校学習指導要領による生活科の実践事例等に記された単元目標を例示したものである。この時期の単元目標は、ごく大まかには二つのタイプに分けられる。

一つは、表5の①, ②, ③のように関心・意欲・態度や表現、活動することそのものが重視されているタイプである。「気付き」については、表5の③に「学校にはたくさんの人がいること」が見られるが、このほかに「自分のよき」「友達のよき」があげられているものもある。また、単元目標には、特に「気付き」についての記述がないものも見られる。このタイプの

表4. 第1学年社会科「学校」に関する学習の単元目標例 (1977年版)

事例 No	単元名(小単元名) (時数)	単元目標類
①	私たちの組(4)	入学して味わった楽しい体験などを発表させ、自分たちの学校には、いくつかの教室があり、たくさんの人がいることに気付かせ、学校集団の一員としての意識をもたせる。
②	学校ではたらく人 たち(保健室の先生)(6)	学校には、養護の先生がいて、学校全体の人たちの健康安全を守るための仕事をしていることに気付かせる。
③	学校ではたらく人 たち(給食のおばさん)(8)	給食のおばさんたちは、大量のおいしい給食が昼までにできあがるように作業の手順を考えて仕事をしていることに気付かせる。
④	みんなで使う学校 のもの(6)	学校にある道具や施設をみんなで共用していることに気付かせ、その利用の仕方を考えさせる。
⑤	わたしたちの学校 (15)	学校の施設、設備や行動の仕方などに気付かせたり、そこで働く人々の仕事と自分たちの学校生活の意味を考えさせたりしながら、学校生活での自立を図り、学習への期待感を育てる。
⑥	学校で働く人々 (10)	1. 先生のいろいろな仕事の内容や役割がわかる。 2. 給食調理室で働いている人々の仕事の様子がわかる。 3. 用務員さんの仕事と自分たちの学校生活につながりのあることがわかる。 4. 学校のいろいろな施設配置がわかる。
⑦	たんけんしよう (26)	○学校やその周りには、私たちの生活を支えている人々の仕事や施設のはたらきがあることに気付かせる。 ○私たちの生活を支えている人々の仕事の様子や共用している道具・施設を観察して、絵にかいたり、物を作ったりして、気付いたことを発表することができる。

〔出典〕

- ①吉田恭子執筆、溝上泰編著『小学校社会科指導細案 第1学年』明治図書出版、1980、pp.31-37
- ②倉沢達雄執筆、溝上泰編著『小学校社会科指導細案 第1学年』明治図書出版、1980、pp.38-43
- ③倉沢達雄執筆、溝上泰編著『小学校社会科指導細案 第1学年』明治図書出版、1980、pp.44-49
- ④塚原明彦執筆、溝上泰編著『小学校社会科指導細案 第1学年』明治図書出版、1980、pp.50-58
- ⑤内藤善康・木下須美子執筆、高野尚好編著『社会科教科書の分析と授業づくり 小学1年』明治図書出版、1982、pp.165-174
- ⑥広田朝子・稲葉麗子執筆、鈴木敏昭編著『社会科到達度評価指導事例集 小学1・2年』明治図書出版、1983、pp.48-50
- ⑦村岡徳治執筆、溝上泰編著『社会科基礎・基本の体系的指導 小学1年』明治図書出版、1984、pp.50-54

表5. 第1学年生活科「学校」に関する学習の単元目標例(1989年版)

事例 No	単元名(小単元名) (時数)	単元目標類
①	がっこうめぐりを しよう(15)	○学校の人々・施設・自然を自分の力で探検することができる。 ○探検で得た気付きや自分の思いを大切に表現できる。 ○学校探検を通して生き生きと楽しく学校生活を送ることができる。
②	がっこうってどん などこ(15)	○自分をとりまく人々や施設・自然などを通して、学校に親しむ。 ○人とのかかわりを広げ、集団の一員としての自覚を高めていく。 ○生活への対応を通し、学習への基礎的な力を付けていく。
③	がっこうのひみつ をさがそう(8)	・喜んで学校探検ができる。 ・学校にある施設や設備に親しみをもつ。 ・学校にはたくさんの人がいることに気づき、楽しい学校生活を送ることができる。
④	仲町小って楽しい な(18)	学校には、いろいろな施設があることやたくさんの先生、友達などがいることが分かり、それらの施設を使ったり、先生や友達と親しくなったりして、学校生活を楽しく過ごすことができるようにする。(別途、3観点による評価規準が示されている。)
⑤	ぼくもわたしも平 野小の子(11)	○自己紹介をしたり、みんなで遊んだりして、友達と一緒に行動する楽しさを感じながら、友達と仲よくなることができるようにする。 ○学校探検を通して、未知なものを見つけるおもしろさを味わいながら、自分の思いや願いを実現するために、学校のものや人にはたらきかけることができるようにする。 (別途、3観点による評価規準が示されている。)
⑥	私の学校(14)	学校探検を通して、先生や友だち、さらに施設や自然などと豊かに触れ合うことにより、学校という集団の中の一人であるという意識をもち、楽しい学校生活を送ることができる。 具体的目標 ①生活への関心・意欲・態度 ア. 学校にいる人や学校の施設に興味・関心をもち、進んで探検しようとする。 イ. 友だちと協力し、楽しく学校探検をしようとする。 ②活動や体験についての思考・表現 ア. 友だちや先生方に挨拶や自己紹介をしたり、サインをもらったりすることができる。 イ. 探検したことを自分なりの方法で表現することができる。 ③身近な環境や自分についての気付き ア. 学校探検を通して、学校の中にはいろいろな施設や設備のあることや担任の先生以外にもたくさんの人が仕事をしていることに気付いている。

〔出典〕

- ①岡根幸子執筆、河野重男・森隆夫監修『新学習指導要領の指導事例集 小学校生活科 第1巻 第1学年の指導と展開』明治図書出版、1990、pp.30-35  
 ②相原貴史執筆、河野重男・森隆夫監修『新学習指導要領の指導事例集 小学校生活科 第1巻 第1学年の指導と展開』明治図書出版、1990、pp.36-41  
 ③大郷良輔執筆、新見謙太・田中力編著『授業改善シリーズ 子どものよさが生きる生活科 1年』教育出版、1994、pp.20-33  
 ④木村文子執筆、中野重人・中村満洲男編著『生活科の評価』第一法規、1992、pp.60-69  
 ⑤永江幸子執筆、嶋野道弘・川上昭吾編著『新しい学力観に立つ生活科の学習指導と評価』明治図書出版、1994、pp.32-39  
 ⑥田中明・津田妙子執筆、奥井智久編著『生活科の指導と評価』教育開発研究所、1994、pp.19-32

単元目標は、「具体的な活動や体験」「自分とのかかわり」「自分自身や自分の生活」「習慣や技能」「自立」など生活科の教科目標に見られる特性を強調するものである。

もう一つは、表5の④、⑤、⑥のように単元目標や具体的な目標、評価規準などにおいて「学校」に対する「気付き」が明示されているタイプである。このような単元目標は、生活科における評価研究の事例として示された実践事例などに見られる。これらは、小学校指導要録における「各教科の学習の記録」の「観点別学習状況」の観点を基礎として単元目標等が設定されているものである。

#### 4.3. 1998年版による第1学年生活科における「学校」に関する単元目標

表6に示すように、評価規準との関係において単元目標の精密化が一層図られているのが今日的な状況である。最近では1単位時間の各学習活動にも評価規準が明示されている場合も多い。いわゆる学習指導要録の記載事項や形式が急激に変化しつつある。

1998年の改訂期における「学校」に関する学習の単元目標の変容は、何が要因であろうか。この改訂では、小学校学習指導要領の生活科部分は、内容を第1学年、第2学年まとめて示したことを除き、実質的には大きな変更点はない。また、教科書についても事例としたものからは大きな違いは認められない。ここでは、小学校指導要録の改訂、特に、教科の評定を相対評価から絶対評価へと変更したことがその主たる要因であると考えられる。

生活科については、小学校第1学年及び第2学年のみに設置された教科であることから従前より評定は行われていない。しかし、今回の改訂により、他教科において絶対評価のための詳細な評価規準や評価基準が必要となった関係で、生活科にあっても事実上これまで曖昧なところもあった評価規準や評価基準が見直されたのである。単元目標や各時間の目標と評価規準とは表裏をなすものであることから、単元目標のあり方も変容してきたと考えられるのである。

## 5. 生活科における「気付き」の問題

単元目標や各時間の目標の精密化が進行する中で、「気付き」に対する意識が高まっていることは、これまでの生活科の課題に答えるという意味で一つの前進であろう。しかし、今日の状態に問題はないのだろうか。ここでは、以下の2点を指摘する。

### ① 教材研究と子ども研究から「気付き」を設定しているか

単元目標は、教科課程の目標を踏まえつつ、事象の本質と子どもの実態との関係の中から具体的に設定されるものである。しかし、単元目標が精密化されているものの中には、評価規準の具体例として示されたものだけを基礎にしていると思われる場合もある。単元目標や各時間の目標及び各学習活動における内容に具体性が乏しいのである。各学校における教材研究や子ども研究が不十分なまま形式的に単元目標を精密化した場合、単元目標や各時間の目標として設定される「気付き」は抽象的なものとなり、機能しないであろう。生活科のように背景となる特定の学問領域を持たず、学問・諸科学の系統性から内容を導くことが難しい教科にあって、「学校一般」とともに、「本校」における教材研究や子ども研究から「気付き」を設定することは極めて重要なことである。

### ② 「気付き」が生起する授業構成、授業実践になっているか

評価規準の設定は、それによって評価規準に到達することのできるような授業実践がなされることに意味がある。逆に言えば、そのような授業実践がないまま評価だけが存在するならば、教育としての意味を失うのである。

「気付き」が生起するような授業構成、授業実践のためには、前項で示したような教材研究、子ども研究を通して得られた内容を「気付き」として予め明確に記述しておくことが必要である。そして、具体的な活動や体験の中でそのような「気付き」が生起するとともに、それが一斉授業の中で、交流され共有されるように計画しておかなければならない。生活科教育において、具体的な活動や体験の構成とともに、一斉授業における話し合い学習の構成についても研究が必要である。社会科準教科書から生活科教科書への移行によって、「一斉授業の場面」や「子どもの発表を整理する板書の場面」が削除されたことが、それらの軽視にならないように留意すべきである。生活科教育の研究が活動研究や開発研究に偏り、話し合い活動の構成に関する研究（例えば、発問研究など）が十分でないことは問題であろう。

## 6. おわりに

本小論では、「学校」に関する内容の変遷を、学習指導要領、教科書類、単元目標を通して検討し、「気付き」の問題について考察した。ただし、検討した教科書類や単元目標は事例であり、全体を概観すること



表6. 第1学年生活科「学校」に関する学習の単元目標例（1998年版）

事例 No	単元名(小単元名) (時数)	単元目標類
①	学校大好き!(12)	<p>・学校には、様々な施設・設備があり、それらの使い方が分かり、ルールを守って生活することができる。</p> <p>・学校には、自分たちの生活を支えてくれる先生や友達がいることが分かり、進んであいさつをしたり、仲よく遊んだりできる。</p> <p>・自分で考え判断し、行動する活動を通して楽しく遊んだり、自信を持って生活することができる。</p>
②	がっこうだいすき (12)	<p>学校にいる人と直接かかわり合いながら、見たり、聞いたり、探検したりする活動を通して、学校の中の様子やそこにいる人、そこで働いている人のことを知り、楽しい学校生活を送ることができる。</p> <p>具体的目標(評価規準)</p> <p>関心・意欲・態度 ①学校にいる人と直接かかわり合いながら、学校を見たり、聞いたり、探検したりしようとしている。</p> <p>思考・表現 ①自分なりの思いや願いをもって友だちと遊んだり、学校を探検したりすることができる。</p> <p>気付き ①学校には、多くの人や施設があり、これから始まる学校生活が楽しく過ごせる場であることに気付いている。</p>

〔出典〕

- ①森里美執筆，田中力・寺崎千秋編著『子どもの学びを発展させる 生活科の授業と評価 上』教育出版，2002，pp.18-25  
 ②根本裕美執筆，角屋重樹監修・著『教育技 MOOK 生活科の授業展開と新しい評価』小学館，2002，pp.23-26

のできる量的データに基づいた考察ではない。さらなる精査が必要である。また、今回は扱わなかったが、授業の実際における子どもの「気付き」も重要なデータである。これらを総合して、授業実践のレベルにおける「気付き」の問題を考察し、「学校」に関する単元で何を「気付き」とすべきかという具体的な内容を示していきたい。今後の課題とする。

### 【注】

- 1) 例えば、中野重人「生活科の学習指導と評価」初等教育資料 平成3年11月号 (No.570), 東洋館出版社, 1991, p.57
- 2) 例えば、谷川彰英『生活科で授業が変わる』明治図書出版, 1991, pp.98-101
- 3) 例えば、無藤隆「気づき」, 中野重人・谷川彰英・無藤隆編著『生活科事典』東京書籍, 1999, pp.62-63
- 4) 例えば、嶋野道弘「新しい学力観に立つ生活科の学習指導と評価」, 嶋野道弘・川上昭吾編著『新しい学力観に立つ生活科の学習指導と評価』明治図書

出版, 1994, p.14

- 5) 「学校」に関する内容については、学習指導要領、教科書類、及び単元のそれぞれにおいて内容の括り方が一様ではない。「登下校」や「学校の周り」などが含まれたり含まれなかったりする。本小論では、原則として、学校内における内容や活動に相当する部分を調査、考察の対象とした。したがって、学習指導要領、『指導書』や『解説』、教科書類などにおいて「登下校」や「学校の周り」などの内容や活動に関する頁については、調査、考察の対象としていない。
- 6) 文部省『小学校指導書 生活編』教育出版, 1989, p.8 参照。
- 7) 調査の対象とした4点の教科書類はいずれも東京書籍発行のものである。
- 8) 例えば、国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料—評価規準、評価方法等の研究開発(報告)—」2002。このほか、教育関係の出版社から参考になる書籍が刊行されている。